山口大学教育学部美術教育と台北教育大学との学生交流展

上原　一明・劉　得劭*・池内麻依子**・小林　巧**・林　賢治**・福田　隆眞

A Joint Art Exhibition Yamaguchi University Faculty of Education Department of Art and National Taipei University of Education

UEHARA Kazuaki, RIU De-sao*, IKEUCHI Maiko**,
KOBAYASHI Satoshi**, HAYASHI Kenji**, FUKUFA Takamasa
(Received January 15, 2008)

キーワード：台湾、海外学生展覧会、国際交流、台北教育大学

はじめに

2006年11月、山口県国民文化祭に併せ、台湾の国立台北教育大学の4年次43名による海外卒業制作展が山口大学大学会館にて行われた。その試みは台湾においても極めて稀であり、大学運営における教育の国際化が叫ばれる中での実践的な展覧会である。それを受けるかたちで翌年2007年11月、山口大学教育学部美術教育学生有志による海外展覧会を台北教育大学芸術学部画廊にて開催した。出品者は、学部の 3、4年生と大学院生を中心とした有志した学生で構成された10名。その展示空間は「間」を生かした、日本的で緊張感のある空気を意図した。今回の展覧会は、学生の発表の場を海外にて開催することにより、国際的視野の拡大、国際交流の実践、作品創作の高揚を意図している。以下、台北教育大学における展覧会に至る経緯とその内容及び意義について。更にそれらに伴う国際交流の実践と重要性について述べる。

1．山口大学における台北教育大学「I(E)nter 芸質介入」展

台北教育大学は、2004年に初めて海外卒業制作展を沖縄県にて開催した。台湾から一番近い外国として沖縄県を選んだのであるが、それは学生にとって非常に有意義な経験になったようである。その2年後山口大学にて開催されたのが、この「I(E)nter芸質介入」展（台北教育大学芸術学系第96期生卒業制作展）である。

その開催要項を以下に述べる。

表題の芸質の「芸」と異質の「異」は中国語で同じ発音をすることと、「Enter」は参加、加入、そして「en-」は本来ギリシャ語で入れる、入るという意味があることから「I(E)nter芸質介入」展としている。パソコンのEnterはとても重要なアイテムであり、人間の喉の

＊台北教育大学教授　＊＊山口大学大学院教育学研究科修士課程教科教育専攻美術教育専修

ように言葉としてメッセージを伝えることにあたる。インターネットにおいてEnterを押すと、そのメッセージは向こう側のバーチャル・スペースを通過し、世界の人々につながることが出来る。Enter を押すこととは単純に入力することだけでなく、個人の意思や思いをエキスポテーションすることにもなる。 Inter はラテン語の前置詞で、between, among （～の間）という意味も持つ。

展覧会のテーマは、「"enter"の入力で、"inter"が達成される」ということであり、この入力は、台湾から日本への交流展という意味以外に、我々が持ち込んできた文化的性格も含む。即ち本展覧会のテーマである「入力」と「介入」の関係には、台湾と日本の隙間の関係や、それらの地理性や文化性の隙間も含まれる。我々はあえてその隙間を埋める必要はなく、この展覧会を通してそこに特別な繋がりをつくり、この二つの場所に新たな関連性を構築したいということも含まれる。

日本統治時代、多くの日本の文化が台湾に入ってきた。それから数十年間に渡り台湾の体制や文化に大きな影響を与えた。日本も明治維新の新しい時代に西洋からの文化を取り入れ、東アジアの強国としての地位を獲得した。入力するということは、単に情報を伝達することだけではなく、旧文化に新たな血を取り入れて革新することでもある。

台北教育大学芸術系の発展史は同時に台湾美術史そのものでもある。日本統治時代の石川欽一郎ら日本人は西洋画を台湾に伝え、多くの台湾人著名画家を輩出した。今回の交流展覧会は、「芸」術文化の入力という面だけでなく、「異」質文化の介入という意味も含まれている。入力は反復を繰り返し新世代の芸術方法に導き、介入は台湾の学生達にとって新たな境地を知る事となる。そして、「入力」する事によって大きな成果が得られる事を期待している。更にまたこの日本との交流展を通して、我々の文化的視野や国際観の拡大とこれからお互いより良い関係を構築していけることを願う[1)]。

2．台北教育大学における展覧会経緯とその意義

近年日本にとって、東アジア共益圏としての中国・韓国・台湾等の存在はますます緊密化している。特に大学における海外から来日する留学生の比率は、東アジアからの留学生が圧倒的多数を占めている。逆に日本から欧米へ渡る留学生の数に比べ、東アジアへ目を向けた日本人留学生は、今尚マイノリティーなのが現状である。あえて留学しないにせよ、東アジア圏の学生との接触による国際的な視野を広めることの重要性を痛感し、今回の展覧会を企画した本執筆者の福田は“方法論を学ぶより創造性の構築の最重要性”を指摘する。それは、国内における日常的な体験・思考・判断・行動とは異なる、海外において受ける一連の経験によって、より高い人間的創造性の構築が期待出来るのからである。今回、日本と地理的にも近く、歴史的関係性の高い台湾に着目した。日本の国立大学の中でも唯一東アジアに観点を置いた、本学博士課程東アジア研究所で博士学位を取得した台湾出身の留学生との関連で、台湾におけるトップクラスの教育系大学である台北教育大学との信頼関係を築き、彼らの海外卒業制作展の誘致を実現させた。

台北教育大学は、2004年に初の海外卒業展覧会を沖縄県那覇市公設市場にて開催した実績があり、この展覧会形式を継続すべく山口国民文化祭開催に併せるかたちで企画された。経費に関しては、台湾政府行政院文化建設委員会（文化庁に相当）や中華航空の助成、生徒の保護者による寄付金等により渡航旅費・滞在費がまかなわれ、生徒の経済的負担を軽

減した。展覧会開催を通して国際交流を実践し、国際感覚を養うと同時に幅広い視野を構築させるために、政府や企業、保護者が理解を示し金銭的援助を施すという、その意味は特筆に価する。

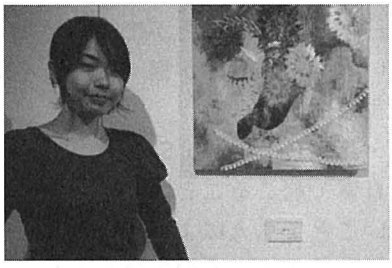
彼らの展覧会は、本学学生にも強い影響を与えた。その延長線上として位置付けるかたちで企画した本展覧会は、福田の呼びかけにより集まった10名の学生有志による海外展覧会として行われた。展覧会開催にあたっては毎週会議を開き、綿密に打ち合わせをした。作品は全て持ち込みで、各自の作品梱包も工夫した。台湾の桃園国際空港に到着すると、台北教育大学芸術学部の劉得劭主任らが大型バスで出迎えてくれた。直接宿泊施設に案内された後、展覧会場である２階の芸術学部ギャラリーへと向い、その日の夜と翌日の早朝とで作品を展示した。展示には台北教育大学の学生の協力でスムーズに事が運んだ。

ここで、出品者とその作品を簡単に紹介する。

（1）梅原望（美術教育３年生）絵画

・作品名「Dream of mermaid」

アンデルセンの『人魚姫』は自分の世界から旅立ち、他人のことを思い遣ることができるようになるという少女の成長をあらわした物語だと思う。この作品は、人魚姫がまだ自分の世界に閉じ篭り、でも外界への憧れをどんどん強めていっている場面です。



梅原望（美術教育３年次）
作品名「Dream of mermaid」

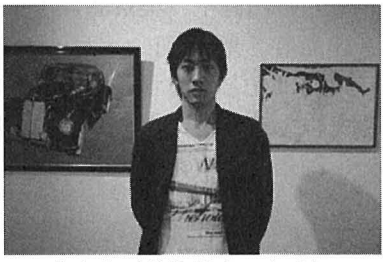
（2）勝木寛真（美術教育３年生）イラストレーション

・作品名「世界標準時刻」

この作品は、「経度０度」が「時刻の基準点」であるという子午線を決定するための観測のために定められた概念を無視し、「地球が本来持っている世界軸・時間軸で人間の営みを観測する」というコンセプトのもとに描きました。

・作品名「MOBILE」

「MOBILE」という単語は「固定されていない」という意味を持ちます。今にも動きだしそうな絵、また既成の自分のスタイル「固定せず」打ち壊す作品でありたいという思いがありました。

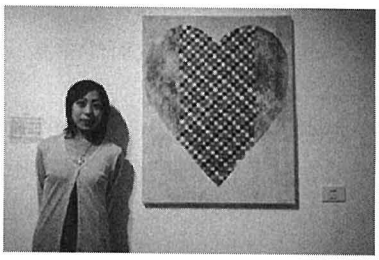


木寛真（美術教育３年次）
作品名「世界標準時刻」
作品名「MOBILE」
作品名「澄」

・作品名「澄」

「澄む」という言葉には「上品で落ち着いている」という意味があり、作品に持たせたかった「品」を壊さないように細いペンで繊細さを意識して描きました。この作品は外見だけに捉われない理想の美しさや女性らしさの基調、そして文化的・社会的な価値観の枠組みに固定されないそれらを表現したくて描きました。

（3）西村美香（美術教育３年生）絵画
・作品名「心模様」
人間のこころの中にあるもやもや感とはっきりしたところを表現しました。カラフルな色は喜び・怒り・哀しみ・楽しみを表しています。

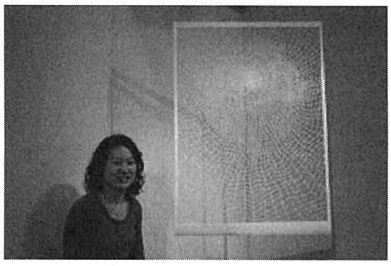


西村美香（美術教育３年次）
作品名「心模様」

（4）濱田智奈美（美術教育３年生）写真
・作品名「sky」
空の表情は同じものを二度と見ることができません。一度しかみることが出来ない空を写真に収め、「空」という一つのものが様々に美しく変化することを表現しました。
・作品名「Photo Scrap」
日常で起こることはいつか忘れてしまいます。何気ないことでも人によっては嬉しかったり、切ない気持ちになります。その気持ちを写真によって表現しようと思いました。

濱田智奈美（美術教育３年次）
作品名「sky」
作品名「Photo Scrap」

（5）竹内直子（美術教育４年生）紙表現
・作品名「光と影」
テーマは光と影です。繊細な線が組み合わさった形に光を当てることにより、美しい影を映し出したいと思い、制作しました。

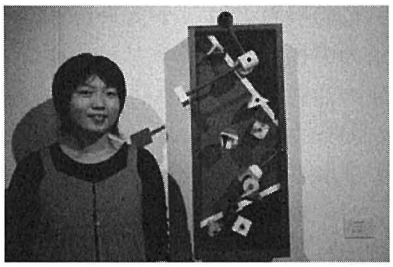


竹内直子（美術教育４年次）
作品名「光と影」

（6）山口早紀（美術教育４年生）絵画
・作品名「ポートレート　灰」「ポートレート　青」私の作品は正面を向いた人物がモチーフです。そのような作品の連続によって、見に来た方が作品と対話してほしいと考えました。

山口早紀（美術教育４年次）
作品名「ポートレート　灰」
作品名「ポートレート　青」

z（7）綿谷優美子（美術教育４年生）木工
・作品名「ステップ」
私の作品は動きをテーマにしています。今回の「ステップ」は動きますが、動かない作品でも動きがあり見ていて心が弾むものを作りたいと考えています。自由な発想と感覚を大切にしています。



綿谷優美子（美術教育４年次）
作品名「ステップ」

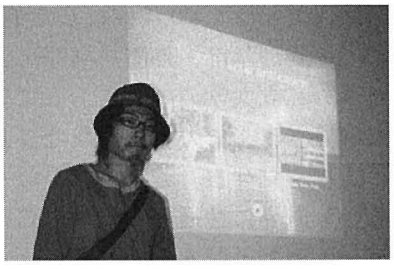
（8）池内麻衣子（大学院教育学研究科修士課程１年生）陶芸
・作品名「a　head　of　cabbages」
この作品は、身近な食べ物である野菜のキャベツを、食べ物を入れる食器にしてみました。器の表面は、シンプルではなく、あえて彫刻的な表現にし、面白みを表現しようと思いま
した。

池内麻衣子（大学院教育学研究科１年次）
作品名「a head of cabbages」

（9）小林巧（大学院教育学研究科修士課程１年生）映像
・作品名「身体動作で操作する視聴覚教材」
本作品は、現在、自身が研究・開発を行っている、教育現場での使用を目的とした身体の動きを音や映像などの操作に割当てることで新しい表現を可能にするシステムです。今回展示した作品では、フェーダやノブといったコントローラを動かすことで演奏や映像の操作が出来る内容になっており、展示時には、実際に来観者自身に作品に触れて、操作してもらえるような体験型の作品形式にて展示を行いました。

小林巧（大学院教育学研究科１年次）
作品名「身体動作で操作する視聴覚教材」

（10）林賢治（大学院教育学研究科修士課程１年生）映像
・作品名「hayashikennji 作品集」
この作品は学部３年次から制作してきた映像作品を一枚のD
VDに収録したものです。写真素材のデジタル編集された実写アニメーションから３DCG を用いた作品まで１１の作品が収録されています。多くの作品は「動き」「時間」といったアニメーションの概念を意識して制作してきました。



林賢治（大学院教育学研究科１年次）
作品名「hayashi kenji 作品集」

この展覧会は「十人十色　So many men, so meny minds」と題し、各自独自の創造性探求の多様性をテーマとし、現代日本の若い年齢層の表現の「今」を端的に表している。梅原の油彩キャンバスに刺繍やレースをあしらえた実験的な作品で、豊な色彩感覚の中に自らの夢や理想を表現した。勝木は漫画・イラスト表現により言葉に重きを置き、現代社会の退廃を軽快に捉えた。西村は、鮮やかなハート型モザイク模様を女性的な感受性で表現した。濱田は、日常の風景をカメラ・レンズを通した叙情的な写真を壁面にちりばめた。竹内は、蜘蛛の巣状に切り取った紙を壁と壁の角に吊り下げ、実体と影の関係を空間の中にうまく生かした。山口は、無機的な女性のポートレートに自己投影し、その内面をえぐるような存在感を示した。綿谷は、視覚的に遊び心を誘う楽しい壁掛けの木工作品を展示。池内は、キャベツのオブジェが大皿・小皿に分かれるユニークな陶器を出品した。小林は、キーボードを人体動作に例え、動きと音響・映像をリンクさせた装置をセット。林は、これまで制作してきたＣＧ作品を白壁に投影しその表現の幅の広さが伺えた。現代日本の映像・音響表現の多様性を示した小林と林の作品は、実写映像の編集が主流である台湾の学生らが高い関心を示した。4 日間の短い開催日数ではあったが、日台双方の学生にとって非常に意義のある展覧会であった。

出展した彼らは、異国の地に赴き自らの作品を展示することによって、その国に対する理解と見識が深まると同時に、己と自国の文化に対する自覚と誇りを再認識したようである。更にまた、異なる環境による多様な価値意識の存在と普遍的人間性の喜びを感じたであろう。

３．国際交流の実践と重要性と今後の国際交流について

現代の日本に限らず、台湾においても各県の教育系大学は深刻化している少子化問題に直面し、学校教員養成という本来の教育内容だけでは成立たない状況にある。その渦中にある台北教育大学は、新しい時代の到来に向けての教育課程改組を試み、授業内容の専門性を選択筋をを広げ、学生のニーズに合わせて教育内容を充実させている。学内では最近新たにデザイン学科と芸術学科が合併し、更なる内容の充実と、国際的展開の拡大が見込まれる。台北教育大学は、その意味においてもその存在感を発揮すべく積極的に取り組んでいる。その表れが海外学生卒業展覧会であり、メトロポリタン美術館石膏像博物館の開設である[2)]。

ここで、国際交流を活発に展開している台湾の淡江大学についての例を述べる。

淡江大学は 1950 年開校した英語学校を前身とし、現在では文学部・理学部・工学部・商学部・管理学部・外国語学部・国際研究学部・教育学部等で構成された総合大学であり、台湾の私立大学の中でもトップクラスに位置する。淡水本校に加え台北校・蘭陽校の分校が増設され、その学生総数は 3 万人を有するマンモス校である。淡水校の周囲は学園都市の様相を見せる。若手の優秀な人材の採用確保、国立大学を退官した著名な教授陣や、台湾の政財界に精通した人材を登用することで堅牢な構えをみせる。海外の姉妹提携大学は、アジア地域・環太平洋・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ等世界 22 カ国・97 校に及ぶ。近年、北京や上海等中国大陸の各都市・各大学との相互講演会や学術シンポジウムを開催し、来たる時代に備えている。これらは、在学生や卒業生の研究促進や就職、ビジネス・チャンスにも有利に傾き、自ずとその大学力を向上させる。更にはその実績が評価され、

政府や企業からの助成や投資も受けやすく、巨大なプロジェクトの実行が可能となる。これらの活動が国益にも大いに貢献することは明白で、国際交流の重要性が理解できる。

（1）山口大学・東アジア研究所と淡江大学・日本研究所との話し合い

2007年2月、山口大学大学院東アジア研究科長・小谷典子、辻正二、福田隆眞、上原一明らが相互研究の協力関係を結ぶべく、淡江大学日本研究所を訪問した。東アジア研究科における台湾の大学機関との実質的な研究・アンケート収集等相互協力体制を結ぶための訪問である。同研究科に数名の淡江大学出身者が在籍していることや、台湾の中でも規模が大きい総合大学であるということから、将来的に相互発展が期待されるということがその理由である。文学部・中国文学の馬銘浩准教授を介し淡江大学学術副学長である馮朝剛教授に面会した。そこでは互いの大学の特色や大学を取り巻く諸問題点について意見交換がなされた。日本語に精通した淡江大学・日本研究所の担当者も同席しており、具体的な協力体制が話し合われた。

（2）台北教育大学社会芸術学部との組織的交流の計画

山口大学教育学部美術教育教室と台北教育大学との交流は、学生の展覧会を通して始められた。今後、学生の作品展ということだけでなく、美術教育にかかわる内容で交流の可能性を探ることが計画されている。

その一つとして、学生の授業受講がある。山口大学と台北教育大学の美術教育教室が相互に補完する体制で、美術の制作に関わる領域の授業を相互に集中授業の態勢で受講を可能にする。

また、美術教育の領域においても研究を通して学生と教員の交流を進めることが計画されている。既にその一例として、2007年11月に台北教育大学での、美術教育・音楽教育のシンポジウムに福田が発表をし、研究内容の交流を行っている。

更に、美術教育だけでなく、芸術教育の観点から音楽教育との協同による教育・研究の交流が期待される。芸術教育の観点の必要性については、現在、台湾においては、小学校・中学校において美術教育・音楽教育は「芸術と人文」の学習領域で実施されている[3)]。芸術教育の総合化を図り、実施している。そうした状況から、美術教育と音楽教育の協同による芸術教育の教育・研究の交流を進めることが必要と考えられる。

注

1）台北教育大学芸術学系第96期生卒業制作展「I(E)nter 芸質介入」展　案内パンフレットより

2）上原一明他　「台北教育大学にみられる美術教育改組の一例」　山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第24号　2007

3）台湾の「芸術と人文」学習領域について福田は以下の報告をしている。
福田隆眞　「中国、台湾における九年一貫教育課程と美術教育について」　大学美術教育学会誌38号　2006
福田隆眞他　「台湾における芸術と人文科目の美術分野の内容について」　山口大学教育学部研究論叢第５４巻　2004